バッハ鍵盤音楽レパートリー表の使い方

「レパートリー」という言葉を「いつでもほぼ完璧に弾ける曲」と定義するのは、あまりに厳しすぎます。
　もっと簡単にクリアできる基準をいくつも用意して、どんどんレパートリーが増えていくように工夫した方が、結果として実り多い音楽人生が得られます。

　レパートリー表の「判定基準」の欄には、以下のような基準の中から自分に合ったものを自由に選びましょう。
　レベル１から８までの欄がありますが、必ずしも全部を使う必要はありません。

　判定基準の例：
　A)　曲を知っている
　B)　楽譜を見ながら曲の音源を聴いた
　C)　曲の主題を片手で弾いてみた
　D)　曲の始め（と終わり）の数小節を両手でゆっくり弾けた
　E)　曲全体を片手ずつ弾けた
　F)　曲の前半を両手でゆっくり弾けた
　G)　曲全体を両手でゆっくり弾けた
　H)　曲全体を両手で目標の速さで弾けた
　I)　曲全体の演奏を録音したか、他人に披露した
　J)　曲全体を両手で目標の速さで１ヶ月弾き続けた

　一番右のレベルにまで達した曲は、いつでも完璧に弾けるとは言えなくても、「一度は弾けるようになった曲」と言えます。これをレパートリーと呼ぶことに異論はないでしょう。

　でも、すべての曲をそのレベルに仕上げるには、人生は短すぎます。それに、どの曲も一番右のレベルにまで仕上げることにこだわると、「経験する曲の数が非常に少なくなる」という弊害もあります。

　とりあえず曲を知っているだけでも、楽譜を見ながら音源を聴くだけでも「レベル１のレパートリー」と呼んでしまうのは、単なる妥協や諦めではありません。「多くの曲を知ることによって視野を広げる」という、積極的な学習の一環なのです。

　以下は、レベルと判定基準の選択例です。自分が一番喜びと充実感を得られる組み合わせを見出して活用しましょう。

　レベル１：楽譜を見ながら曲の音源を聴いた
　レベル２：曲の始めと終わりの数小節を両手でゆっくり弾けた
　レベル３：曲全体を両手でゆっくり弾けた
　レベル４：曲全体を両手で目標の速さで弾けた
　レベル５：曲全体の演奏を録音したか、他人に披露した